学内活動報告
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究 8
P.90－95（2020）

【報告】フィンランドのクウォッパヌンミ総合学校の視察と教員へのインタビュー

“Report” Visit to Kuoppanummen Koulukeskus and Interview with Teachers in Finland

石　塚　淳　子[1)]　　佐　藤　道　子[2)]　　渋　江　かさね[3)]
ISHIZUKA Junko　　SATO Michiko　　SHIBUE Kasane

Ⅰ．はじめに

フィンランドの教育は、PISA（OECD 主催による国際学習到達度調査）で世界各国から注目され、その教育の在り方については日本でも多くの教育関係者らが関心を寄せている。筆者らは数年前より日本の看護教育の急激な大学の増加に伴う看護教員のバーンアウトの問題と教育の質の低下を防ぐための研究に取り組んでいる。2019年３月に本学の国際交流委員長である山下巌教授、フィンランドのユバスキュラ応用科学大学のペルティ先生、マリオ先生、ラハティ応用科学大学のハンネレ先生のアドバイスにより、フィンランドにおける看護系教員へのインタビューと小中一貫校の視察と教員へのインタビューを実施することができた。

本稿では小中一貫校の視察と教員へのインタビューを中心に述べたい。

1）順天堂大学保健看護学部
2）順天堂大学保健看護学部　非常勤講師
3）静岡大学教育学部
1）2）*Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
3）*Shizuoka University Faculty of Education*
（Nov. 8, 2019　原稿受付）（Jan. 31, 2020　原稿受領）

Ⅱ．フィンランドの教師

フィンランドの教師は、医師や弁護士と並んで専門職として認められ、教養があり尊敬される職業として社会的にも認められている。したがって人気も高い職業であり、教師を目指す人は多く倍率も高い。

１．フィンランドの教師教育

フィンランドでは「教師こそが教育の鍵だ」と考えられていて、教師の育成にも力を入れている。教師たちは、教師を優秀に育てる教育学によって高度に訓練された力量ある教師として育ち、自信と誇りを持って教育活動に携わっている。つまり、フィンランドの教育の優秀さは、教師の優秀さに由来し、その根底には優秀な教師が活躍できる社会があるということである。

フィンランドでは 1978 年に、教員資格を取るために修士号取得が義務付けられた。教師になるために、５～６年かけて大学で教育の理論から心理学まで学び、半年間の教育実習を受けて教員資格を得て卒業する。

２．教師が専門職であるということ

教師を希望する場合は、大学を卒業し教員資格を得て、地方自治体の教育委員会の公募に応募し採用されて教師への道に進む。しかし実際の教員採用に

おいては、校長を中心に学校スタッフと地域の保護者の代表で組織する採用委員会が書類選考面接を行い自分の学校の教師を採用する。

それは、学校が自分の学校の教師を採用する権限を持っているということであり、学校や保護者を中心とした学校をとり巻く地域の人々の教育に対する考え方が反映されるということである。教師は人気の高い職業であり応募者が多いため、学校側はより優秀な教師を採用することができる。

学校の多くは公立校のため教師は地方公務員であり、自ら希望しなければ原則として転勤はない。したがって、同じ学校に長く務めるため、教師仲間と学校内の改革や教育研究などを継続して行うことができ、教師としての成長につなげていくことができる。

フィンランドの教師が学校（職場）にいる時間は、おおよそ８時から15時ごろまでである。教師の義務は授業時間のみで、そのほかの労働時間は自己研修時間とみなされる。自己研修は学校でも図書館でも自宅でもどこでやってもよいと社会的にみなされている。つまり、教師が個人で時間配分し、労働時間の使い方はそれぞれの教師の判断に任されているということであり、専門職として社会的に認められているということである。

教師は、国家カリキュラムの枠組みの中で自らのカリキュラムを作成して教育を行う。教師の採用に関してもそうであったが、教育内容や教育方法においても学校や教師という教育現場の裁量権が認められているのがフィンランドの教育である。教える内容や方法については教師に任されてはいるが、その根底にあるのは、「学習するのは子どもであり、教師は学びを支援する。子ども一人一人は皆違う。したがって一人一人に合った対応が必要である」というゆるぎのない共通の教育観である。このように、教師の専門性として教師の教育活動に独立した地位が確保されている。

Ⅲ．クウォッパヌンミ総合学校　教員へのインタビューと授業参観および校内ツアー

今回の視察とインタビューの計画については、ユバスキュラ応用科学大学の先生たちと本学の山下巌教授との打ち合わせによって実現した（表１）。本稿では小中学校の視察と２名の先生方へのインタビューについて述べ、看護系教員へのインタビューについては別に報告する機会を設けるとする。

１．２人の教員へのインタビュー

クウォッパヌンミ総合学校（Kuoppanummen koulukeskus）の２人の教員（A 先生と B 先生）にインタビューを行った。クウォッパヌンミ総合学校はヘルシンキから北へ 400 キロメートル程のヴィヒティ市ヌンメラという町にあり、生徒数は小・中学校合わせて 600 人程度で幼稚園も併設している。

２人の先生のインタビュー内容を質問項目に沿って整理した。

１）学歴と教育経験について

２人の先生とも、高校を卒業してストレートで大学に進学したのではなく、A 先生は高校卒業後学校の補助員の仕事を経験して、B 先生は海外で仕事をしたのち、教員の資格を取得するための大学で学び教員になっている。したがって２人とも修士の学位を取得している。

A 先生は中学生（７～９年生）に国語、小説と詩の授業、そして補習授業として移民の子どもにフィンランド語を教えている。B 先生は小学校３年から中学校３年までの生徒に英語を教えている。教育経験は 20 年近い経験豊かな先生方であった。

２）教えることに関わることにしたきっかけについて

A 先生は、学校の補助教員の経験から教育に関心を深め、B 先生は英語の翻訳の仕事の経験から英語の教師にとそれまでに携わってきた仕事の経験を通して教育の道に進んでいた。

３）教育活動を続けるうえで影響を受けた、サポート

表１：フィンランドにおける教育視察および教師へのインタビュー計画

【Planning】

Teacher training and training of nursing teachers in Finland

Purpose: Finland's education from the fact that the "height of teacher quality" has been characterized

Ⅰ Fact to know the characteristics of the education of the following Finland.

1. In Finland most of the talented people are about teacher occupation .
2. Teachers' academic ability is high .
3. Only a person who obtained a master's degree can become a teacher .
4. Yearning and trust for children's teachers is strong, teacher's occupation is the most popular .
5. Teachers can concentrate solely on teaching .
6. Teachers are obliged to participate in training each year .
7. The country shows only the general framework of the education curriculum and does not speak to the management policy of the school at all .
8. The school trusts the teacher and leaves the design of the lesson .
9. The teacher implements a thought-out curriculum .
10. The people trust the country and work for lifelong learning .

Ⅱ Know the nursing education system.

1. Do nurses qualify at Applied Science University?
2. Is only one nurse qualification
3. How much is going to graduate school?

Ⅲ Know the training of nursing teachers , qualifications, training systems.

1. What kind of training courses are there to be a nursing teacher
2. Does teaching at a university require qualification
3. Is there a training system to enhance the quality of nursing teachers
4. Is lifelong education for nursing teachers left to individuals

Method

1. A tour of compulsory education (elementary and junior high school) schools
2. Interview with teachers
3. Visit of nursing college, appearance of lesson, tour of state of practical training
4. Interview with a nursing teacher

を受けた人や同僚について

A 先生は、影響を受けたというよりはリーダー的存在で教育改革などにも携わり、若い教員への指導に関心を持って活動している。B 先生は、教員になりたての頃は、授業を行う上での課題が多く、「補助教員のサポートで助けられた。授業を行う上で補助教員の存在は大きい」と話された。現在のサポート体制は、チューター制があり、チューターの教員が若い教員を指導している。また学校の中にソーシャルワーカーやカリキュラムを組んだり相談したりする専門家がいて体制が整っている。他の先生とも情報交換をする。

4）教師としての成長について

B 先生は、「教員の能力を高めていくためには、教える科目についてよく知っていること。年齢が多様な人たちとコミュニケーション、リレーションを取る。そうすると子どもが先生を信頼して学ぶということが起こる」、A 先生も大事なことは「他の先生たちと連携すること、研修のコースに参加すること」だと話された。また問題解決は教員との連携が重要で、クウォッパヌンミ総合学校は同僚との信頼関係を作ることは難しくなく、教員同士のコミュニケーションのつながりが強いので、多くの問題はそれで解決されるということであった。

5）その他

最近の教育現場の変化として、教員の責任と大変さが違うということであった。たとえば、携帯や PC の影響から生徒の集中力やモチベーション、家族の中での問題（例えば、ご飯を一緒に食べない)、生徒の問題、いじめ、差別、落ち着きのなさが増えてきた。

2．A 先生と B 先生の授業参観

1）A 先生の授業

A 先生は、国語、家庭科、移民の子供のためのフィンランド語を教える資格を持っていて、2004 年から働いているクウォッパヌンミ総合学校では中学生（7～9 年生）に国語、小説と詩の授業、そして補習授業として移民の子どもにフィンランド語を教えている。

今回は、中学生（7 年生）の国語の授業を参観した。生徒数は 12 名程度で、A 先生の机の置いてある部屋で授業は行われた。教室は先生の机と書棚、生徒用の机と椅子、黒板などが置かれたそれ程広くない部屋であった。まず 10 分程度で A 先生から知識の確認のための質問があった。今日の授業は、前回の授業で生徒は課題が与えられ、行ってきた課題を持ち寄りグループワークする予定であった。しかし、課題を行ってこなかった生徒がいたために A 先生は予定を変更し、生徒たちには改めて課題を与えグループで図書館などを使って調べ学習し、それをパフォーマンスで発表するよう指示をした。グループごとに教室を出て行った生徒たちは 20 分程で戻ってきて、順番に発表を行った。それに対し A 先生がコメントをして授業は終了した。生徒たちはそれぞれ役割分担し、恥じらうことや躊躇することはなく自分の役割を果たしていた。

2）B 先生の授業

B 先生は教員歴 18 年のベテランの教員で、小学校 3 年から中学校 3 年までの生徒に英語を教えている。

小学校 3 年生の英語の授業の参観を行った。生徒数は 20 名程度で、B 先生と補助教員 2 名が担当していた。補助教員のうち 1 名は教員の免許を持ち、もう一人は持っていないがクラスのことはよく知っているということであった。教室の前に B 先生の机とプロジェクターがあり、生徒の机の並びは 3 列（1 列は 2 名）になっていた。

最初に B 先生によるプロジェクターを用いた授業が行われ、生徒たちも楽しげに先生の説明を聞き、又先生からの質問に答えていた。その後は 3 人の先生による個別指導が行われた。積極的に先生の所に質問に行く生徒もいれば、何もしないでいる生徒、隣の生徒と相談し合っている生徒等、授業への取り組みはさまざまであった。先生方は、一人一人の生徒

の傍らに行き指導していて、その様子は生徒の状況に応じて丁寧に指導を行っているようであった。

Ⅳ．まとめ

１．２人の教員へのインタビューと授業参観から

インタビューでの言動、授業参観での先生の姿から、A 先生と B 先生は自分の仕事にプライドを持っていると感じた。特に A 先生は大変エネルギッシュな先生という印象を受けた。実際に、正規の授業のほかに移民の子どもにフィンランド語の補充授業（夜間に実施）も行っている。授業などの教育活動以外にも、若い教員に対する教育や学校（教育）改革への関心も深く、これまでもいくつかの改革に関わってきたということであった。また、インターナショナルの部活動も担当し、ニュージーランドやタイと連携していて、ESD（Education for Sustainable Development）のことも手掛けているなど、幅広い活動をされている先生であった。A 先生は現在、周囲からの推薦もあって教員の中でリーダーシップをとって活動しているということであるが、今後は若い教員への教育にも携わっていきたいという願望も持っていた。A 先生のこれらの活動の源は、常に新しいことに向かうチャレンジ精神と経験に基づく自信ではないかと感じた。

B 先生は、教員になる前は翻訳の勉強をしてアメリカで歴史の仕事をしていたという、小学校教員としては異質の経歴の持ち主であった。教員になりたての頃は、教える内容よりは「子どもたちの態度が悪くどうまとめるかという課題があった」というように教え方で苦労したということであった。経験を通して自分の教員としての課題を乗り越えてきたと話す B 先生の話ぶりや醸し出す雰囲気は、明るく楽しげであった。B 先生は同じクラスにいるサポートの先生の存在も大きな支えで、困難を乗り越える力になっていたとも話された。明るく話される B 先生からは、様々な経験を積み重ねて教員としての力を培ってこられた強さを感じた。

２人の先生に共通していることは自分に誇りと自信を持っているということであった。フィンランドでは教育内容や教育方法はその学校や教員に任されている。教員に与えられた自由度は、責任を伴い苦労も多いはずである。A 先生は自分の若いころ、チューター制はなかったといわれ、B 先生は「最初の頃は教え方に課題があった。それを乗り越えてきた」というように、教員としての自立が求められ、自分の力で困難を乗り越えてきたその経験が自信となっているのだろう。さらに、クウォッパヌンミ総合学校では、最近できたというチューターの教員が若い教員を指導するシステムや B 先生のように補助教員と協働して行う授業で教員の教育力を高めて自信につなげていっているのではないかと考えられた。

２．小学６年生の生徒２名による校内ツアーから

インターナショナル（国際交流）のクラブに所属する生徒（男子生徒と女子生徒）２名の案内で校内を見学した。フィンランドの学校がそうであるようにクウォッパヌンミ総合学校の教室は日本のような大きな教室はなく、どの教室も 20 ～ 30 名程度の生徒が学ぶ大きさだった。特別な支援を必要とする生徒の教室もあり、重度の障害だと推測される生徒が授業を受けていた。ほかにも、カウンセリングルームや問題解決のために生徒同士が話し合う専用の部屋などもあった。特に私たちが注目したのは、先生方が休憩時間に集まる部屋であった。教員が集まるといえば職員室をイメージするが、ここはソファーやテーブルがあるちょっとした休憩室のような部屋であった。A 先生から後で聞いたが、先生たちはここで食事をしたりコーヒーを飲んだりしながら情報交換をするということであった。ランチタイムには学食のような大きな食堂で低学年の子どもから高学年の生徒まで大勢の生徒が昼食をとっていた。案内役の生徒は、来訪者があるとインターナショナルのクラブの

生徒が順番でツアーを担当するということで、２人は慣れた様子で私たちを案内してくれ、質問にも適切に答えてくれた。態度や説明の仕方などの礼儀正しさには感心した。

Ⅴ．おわりに

フィンランドの教師に実際に話を聞いてみることができたこと、授業見学やスクールツアーを通して、フィンランドの教育に触れる機会を持てたことは大きな意義があった。小中学校の先生へのインタビューでは、フィンランドの教師が仕事に誇りをもっていることを実感できた。その誇りはどこから生まれたのだろう。けっして日本より恵まれているとは言えない環境の中で、教師たちはどのように成長していったのだろう。今回の結果をヒントにしながら研究を発展させていきたい。

謝辞

最後になりましたが、今回の視察を快く受け入れてくださったクウォッパヌンミ総合学校の先生方、フィンランドの教育視察や教員へのインタビューの実現に向けてご協力いただいた山下巌教授をはじめ関係者の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

1）福田誠治：フィンランドは教師の育て方がすごい、亜紀書房、2014
2）福田誠治:フィンランドはもう「学力」の先を行っている、亜紀書房、2016
3）増田ユリヤ：教育立国フィンランド流教師の育て方、岩波書店、2008
4）北川達夫：フィンランド・メソッド入門、株式会社経済界、2013